



中高生とともに差別と闘う

『母の日』の差別電話

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



シンジの語りはじめ

夏の終わりの、早朝に届いていたLINE。送り主は、教え子のシンジでした。彼には、この夏に開かれた「人権を語り合う中学生交流集会+」に、パネラーとして登壇してもらっていました。そのときの記録と、それをまとめたものを送っていたのです。

彼との出会いは、当時勤めていた中学校に入学してきた三十年近く前になります。同和教育でつながった関係は、今もなお続いていました。

そんな彼に、昨年の三月、現任校に話しに来てもらったのがきっかけで、あらためてこの夏、中学生集會に話しに来てもらったのです。でもそれは彼にとっても、彼の家族にとっても大きな転機となりました。

中学生集會で彼はまず、自分が中学生時代に経験した、学年全体で語り合った部落問題学習について話しはじめました。そして話は、当時起きた差別電話へと移っていきました。

たつくんという友達がいる、今もつながっています。

あるとき、そのたつくんの家に、「あんなのころ部落だろ」という電話がかかってきたことがありました。当時たつくんは一人で電話対応をしていました。それでたつくんからボクのところへ電話がかかってきて、「こんなこと言われたんやけど」と。これは大人一切関わってません。子どもだけのやりとりの話です。それは、自分たちだけで処理でき

る話でもないし、そのまま傷つくだけで終わってしまいうる気もするじゃないですか。だから、「親に話した方がいいんじゃない？」っていうようなやりとりもして。

何が言いたいかわからないと、やっぱりしんどいときとか抱え込んだときに、誰かに言える関係性っていうのを持つべきだっていうことを、すごく思っています。今もそうです。

『母の日』の差別電話

その電話は、彼らが中三の時の「母の日」にかかってきました。

タクヤは「母の日」に、今日くらいは母さんを休ませてあげよう、と妹と一緒に夕食のカレー作りをしていました。これだけでも、彼のやさしさ、家族を大切に思う気持ちが伝わってきます。そんなところに、一本の電話がかかってきたので

翌日に提出された生活ノートの冒頭は次のように書かれていました。

やっぱりくやしかった。つらいな一っと思った。

今日ボクは生まれて初めて、全然知らない他人から部落差別を受けた。ずば一っと思った。

家に電話がかかってきた。親は二人で出かけていて、ボクは妹といっしょにカレー作りを楽しんでいた。

電話の内容はこうだった。「ちよつと調べてるんだけど、あんなのころ、同和地区だろ」というものだった。

ボクは、「えっ、すみませんが、そんなこと聞いて何になるんですか?」とか、いろいろ対応したけど、「○○○(賤称語)なんだろ」としか言わなかった。「○○○違うん、○○○だろ」。ボクは思わず、「そうだったらどしたんですか」と言った。ブーッ、電話が切れた。

タクヤやシンジは、入学当初から徹底して、自分や自分の家族について語り合う部落問題学習を繰り返してきました。ですから、学習のなかで、「エタ」という身分を示す賤称語についても学んでいました。しかし、それを著しく侮蔑する「○○○」という言葉までは知りませんでした。

た。しかもそれが自分に向けられて何度も何度も投げかけられるなどは、夢にも思っていませんでした。

差別が人を変えてしまう

タクヤは激しく動揺します。動揺しますが、学習してきたことを思い出し、何とか踏みとどまりながら果敢に切り返します。安易に肯定することなく、電話の向こう側の相手に向かって、自分が吐いている言葉のおかしさを問うのです。堪えて堪えて、それでも堪えきれず、最後の言葉を告げます。そして電話は、一方的に切られるのです。

何なんだったって思った。くやしかった。自分の顔が真っ青になっているのが感じられた。これが部落差別なのか。これがボクが受ける差別なの

か。本当にビビった。いったい何なんだ、これは……。

みんなに打ち明けたかった。でも、こんなしんどいことでみんなが悩むのなんて、ホント馬鹿らしい。こんな思いをするのは、ボクだけではないと思った。

人間て馬鹿だなんて思う。なんでこんなことにこだわるんだって感じだ。ボクは人間不信になってやろうと思った。

とにかく、くやしかった。全然笑えなかった。考えた。一人で考えた。くやしかった。自分も含めてみんな馬鹿だっと思った。

シンジに電話した。シンジもビビっていたけど、いっしょに慰め合ったり。ちよつぱりパワーが出た。やっぱり親に話そうと思った。

考えてみてください。これが中三の子どもが受けることでしょうか。

部落差別に限らず、いじめも他の差別でも同じですが、多くの人が自分一人で抱え込んでしまいます。本当は誰かに言いたい、けど言えない。言うことで周りを巻き込むことを、

「迷惑をかける」と考えてしまうのです。そして、自分のなかで消化しようとするのですが、消化できるはずありません。だから消化不良を起こし、内側から自分を腐らせてしまうのです。幸いにもタクヤにはシンジがいました。だから、腐ることはありませんでした。しかし、他の多くの人はどうでしょう。そんな関係の友を持っているでしょうか。